

2025. 7. 20 (日) 使徒23:23～35

23:23 それから千人隊長は二人の百人隊長を呼び、「今夜九時、カイサリアに向けて出発できるように、歩兵二百人、騎兵七十人、槍兵二百人を用意せよ」と命じた。

23:24 また、パウロを乗せて無事に総督フェリクスのもとに送り届けるように、馬の用意もさせた。

23:25 そして、次のような文面の手紙を書いた。

23:26 「クラウディウス・リシア、謹んで総督フェリクス閣下にごあいさつ申し上げます。

23:27 この男がユダヤ人たちに捕らえられ、まさに殺されようとしていたときに、私は兵士たちを率いて行って彼を救い出しました。ローマ市民であることが分かったからです。

23:28 そして、ユダヤ人たちが彼を訴えている理由を知ろうと思い、彼を彼らの最高法院に連れて行きました。

23:29 ところが、彼が訴えられているのは、ユダヤ人の律法に関する問題のためで、死刑や投獄に当たる罪はないことが分かりました。

23:30 しかし、この者に対する陰謀があるという情報を得ましたので、私はただちに彼を閣下のもとにお送りします。なお、訴えている者たちには、彼のことを閣下の前で訴えるように命じておきました。」

23:31 そこで、兵士たちは命じられたとおりにパウロを引き取り、夜のうちにアンティパトリスまで連れて行き、

23:32 翌日、騎兵たちにパウロの護送を任せて、兵営に帰った。

23:33 騎兵たちはカイサリアに到着すると、総督に手紙を手渡して、パウロを引き合わせた。

23:34 総督は手紙を読んでから、パウロにどの州の者かと尋ね、キリキア出身であることを知って、

23:35 「おまえを訴える者たちが来たときに、よく聞くことにしよう」と言った。そして、ヘロデの建てた官邸に彼を保護しておくように命じた。

<説教>

本日朗読された聖書には使徒パウロがエルサレムからカイサリア（エルサレムの北西約100 kmの地中海沿岸の都市）に行ったことが記されています。それはこれまでの伝道旅行のように数人のキリスト者と一緒にとか、ときにはパウロー一人で行動したというのは違っていました。それはなんと〈歩兵二百人、騎兵七十人、槍兵二百人〉(23:23)に囲まれ護られ、〈馬〉(24)に寄せられてのことでした。それはそもそもパウロ自身の意志や決断によってのことではなく、ローマ軍の千人隊長の命令によってのことでした。どうしてそんなことになったのでしょうか。それは、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証ししたように、ローマでも証しをしなければならない」と言われた(11)主イエス・キリストの御支配の故でした。

私たちがこれまで学んで来たように、パウロの身柄はそのとき千人隊長の手のうちにありました。イエス・キリストを信じないでパウロに敵対するユダヤ人たちによってエルサレムの神殿で捕らえられ、殺されようとしていたパウロは、駆けつけた千人隊長によって

捕らえられ、助け出されたのでした(27。21:31-32)。パウロはユダヤ人たちの前でイエスの証をし(21:40-22:21)、またユダヤ人の最高法院の前にも立たされました(22:30-23:9)。その度にパウロはいのちの危険にさらされましたが千人隊長の手によって助け出されました。それはパウロがローマでも主イエス・キリストの証しをしなければならないという主の必要の故でした。

この主の慰め励ましのみことばがあった直後に、執拗なユダヤ人たちがパウロを殺す陰謀をめぐらしました。しかしパウロの姉妹の息子(即ち甥)がそのことを知ってパウロに伝えました(16)。それでパウロは百人隊長の一人を呼んで甥を千人隊長のところに連れて行かせ(17-18)、甥はパウロに対するユダヤ人たちの陰謀のことを千人隊長に伝えました(19-22)。

その千人隊長が〈二人の百人隊長を呼び、「今夜九時、カイサリアに向けて出発できるように、歩兵二百人、騎兵七十人、槍兵二百人を用意せよ」と命じ(23)、〈パウロを乗せて無事に総督フェリクスのもとに送り届けるように、馬の用意もさせた〉(24)のです。パウロ一人の身を守るためにこれほどの大袈裟な警備をしなければならなかったのは、それほどユダヤ人たちのパウロ暗殺の意志の固さを千人隊長が感じ取ったからかもしれません。もちろんパウロの身に何かあれば、千人隊長の責任問題にもなりかねないので自分の今の地位を守りたいという思いも千人隊長にはあったことでしょう。また、自分がいかにローマの法と支配に忠実に仕事をしているかというアピールを上司である〈総督フェリクス〉にしたいという思いもあったようです。そのことはフェリクスへの手紙の文面(25-30)からもうかがえます。

それにしてもこのときの、これまでの一連のパウロに対する千人隊長の態度は、全体としてはローマの法に従った適切なものだったように見えます。もちろん軍隊や警察というローマの国家権力の一部を委ねられていた者としてはそれが当然なすべき務めでした。主はご自分の忠実なしもべであるパウロに〈益を与えるための、神のしもべ〉(ローマ 13:4)としてこの千人隊長をお用いになったのです。

なお、直前のローマ 13:3 ではパウロは次のように言いました。〈支配者を恐ろしいと思うのは、良い行いをするときではなく、悪を行うときです。権威を恐ろしいと思いたくなければ、善を行いなさい。そうすれば、権威から称賛されます〉。パウロは「私は今日まで、あくまでも健全な良心にしたがって、神の前に生きてきました。」(使徒 23:1)と最高法院で証言しました。〈あくまでも健全な良心にしたがって、神の前に生き〉ることこそは〈良い行い〉であり「善なる行い」です。パウロが自分を憎み殺そうとするユダヤ人たちを恐れなかっただけでなく、ローマ国家の権力を持った千人隊長の前でも恐れず、落ち着いていたのは、そういうことだったのかと思わされます。千人隊長がパウロをどれほど〈称賛〉していたかは分かりませんが、それまでのパウロの証しを聞き、パウロの行動や態度を見ている中で、総督フェリクスへの手紙に書いたように、明らかにパウロには〈死刑や投獄に当たる罪はないことが分かりました〉(使徒 23:29)。

もちろん〈あくまでも健全な良心にしたがって、神の前に生き〉るキリスト者に対して権力者がいつもこの千人隊長のように良心的に考え、扱ってくれるとは限りません。ときには(いや、多くの場合はと言えるかもしれませんが)権力者は自分の身分や地位を守る(保身)のために自分の良心に反して、悪魔に心を奪われて迫害してくるかもしれません。

しかしたとえそうであってもやはり私たちキリスト者は権力者の前で、その権力者の更におられる主なる神、イエス・キリストの前で、あくまでも健全な良心にしたがって、主に信頼して、主に従って生きなければなりません。

さてパウロを無事に総督フェリクスのもとに送り届けるよう千人隊長クラウディウス・リシアから命令された兵士たちは命令に忠実にパウロを取り扱い、カイサリアの総督にパウロを引き合わせました(31-33)。千人隊長の手紙を読んだ総督も正式な裁判を開くまでパウロを〈保護しておくように命じ〉ました(34-35)。

こうして主イエス・キリストはローマ帝国の千人隊長、総督たちをご自由にお用いになり、彼らを動かしてパウロを守り、パウロがローマで主を証しするというご計画を確実に進めて行かれます。そのためにパウロをなお続けて敵対するユダヤ人たちと引き合わせ、また権力者たち、総督、更には王たち、主イエス・キリストを信じていない人々の前に立たせなさいます。それは一面実に面倒で煩わしいことです。しかしこうして「あなたがたは、わたしのために総督たちや王たちの前に連れて行かれ、彼らと異邦人に証しをすることになります。」(マタイ 10:18)とイエスが弟子たちに言われたとおりになるのです。

そのように、イエス・キリストを信じていない人々が大多数のこの社会の中で、またそういう人々の中から出る人々が政治的、経済的、軍事的権力を握り、権力を好き勝手に振り回す、そんな現実の世界の中でイエス・キリストの福音は伝えられ、その証しはなされるのです。私たちが主イエス・キリストを信じて主に従い主を証しして生きる場は、社会的、政治的、学問的、職業的、家庭的な場です。そういう場での事と無関係ではあり得ません。そういう、常に面倒な問題、ごたごたが絶えない場の中で、それでも主イエス・キリストが最高主権者として地上の全ての権力者の上におられ、すべてを支配しておられることを信じて、やがて最終審判者として再びこの地上に必ず来られる主に聞き従って生きて行くことが私たちの信仰生活です。主イエス・キリストはご自身の敵のただ中でご自身の支配をなさるお方です(詩篇 110)。私たちもこの罪の現実の世にあって、主イエス・キリストを信じて、主に信頼して、あらゆる困難を耐え忍び、世のただ中で主の主権、御支配を証しして生きて行くように。主イエス・キリストの御名によって願い祈ります。